**桜井　哲夫 （さくらい・てつお）**

**１、プロフィール**

詩人。「栗生詩話会」。詩集『津軽の子守唄』、詩・写真集『津軽の声が聞こえる』。NHK総合テレビ『にんげんドキュメント／津軽、故郷の光の中へ』で人生と帰郷を追う。

＜生没＞

1924（大正13）年７月10日～2011（平成24）年12月28日

＜代表作＞

詩集『津軽の子守唄』・『ぎんよう』・『無窮花抄』・『タイの蝶々』・『鵲の家』・『桜井哲夫詩集』・『鶴田橋賛歌』

詩写真集『津軽の歌が聞こえる』

散文集『盲目の王将物語』

＜青森との関わり＞

鶴田町に生まれる。ハンセン病の元患者で盲目の詩人。故郷を題材にした作品を執筆。

**２、作家解説**

桜井哲夫（本名：長峰利造）は、大正13年７月10日に北津軽郡鶴田町妙堂崎で生まれる。長峰家の七男だった。昭和６年４月に水元村立水元尋常小学校妙堂崎分教場に入学。13歳の時にハンセン病が発病する。昭和14年３月に高等科卒業。弘前市で10ヶ月ほど療養生活を送るも回復せず、桜井哲夫と改名し、「らい予防法」によって昭和16年10月に群馬県草津町にあった国立療養所栗生楽泉園に入所。

軽症だったので、農作業や重病患者の看護等、苛酷な労働に明け暮れた。持参した金で日本文学全集を購入。22歳の時に園内で知り合った真佐子と結婚。26歳の時に妻が子供を宿すが、らい患者にとって厳しい状況だったために人工掻爬。29歳の時に、妻が白血病で他界（享年26歳）。翌年に失明し、声帯と指も失う。失明後に入会した栗生盲人会で盲人将棋に熱意を傾ける。昭和58年に園長の小林茂信氏の勧めで栗生詩話会に入会。村松武氏等から詩を学ぶ。昭和60年にカトリックの洗礼を受ける。

昭和63年11月15日に詩集『津軽の子守唄』（編集工房ノア）、平成３年１月10日に『ぎんよう』（青磁社）、平成６年５月31日に『無窮花抄』（土曜美術社出版販売）、平成８年８月20日に散文集『盲目の王将物語』（土曜美術社出版販売）、平成12年４月20日に詩集『タイの蝶々』（土曜美術社出版販売）、平成14年１月30日に『鵲の家』（土曜美術社出版販売）、平成15年１月20日に『新・日本現代詩文庫12 桜井哲夫詩集』（土曜美術社出版販売）、平成16年５月22日に詩・写真（鍔山英次）集『津軽の声が聞こえる』（ウインズ出版）を出版。翌年に『The Call of Tsugaru』（ウインズ出版）と英訳して出版。本名で平成20年３月10日に詩集『鶴田橋賛歌』（津軽書房）を出版。

平成14年２月14日にNHK総合テレビで桜井哲夫の人生と60年ぶりの帰郷を追った「にんげんドキュメント／津軽、故郷の光の中へ」に出演。平成19年２月14日にバチカン宮殿で、ローマ法王に謁見。

平成23年12月28日、肺炎のため栗生楽泉園で87歳で死去。故郷に納骨。

**３、資料紹介**

〇『津軽の子守唄』

図書

1988（昭和63）年11月15日

190㎜×130㎜

「老人は古里津軽の子守唄を歌った／療養所夫婦の間に生まれ／標本室の棚で泣くわが子の声を木枯らしの中で聞いた／二十六歳でその子の母は死んでしまった」と、苛酷な人生と対峙しながら、望郷の思いがあふれている。